

翻刻『天文鈔本新古今倭調集春夏』(下)

片 山 享

新古今集

夏 部 百九首

178 春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかくやま

持統天皇

心敬の説は雲に云り

「

素性法師

179 おしめ共とまらぬ春もある物をいはぬにきたる夏衣哉

とまらぬ春もある物とは、ゐよと云物はとまらで夏は来よともいはぬに、ふときたる哉と也、いはぬにきたる夏衣かなとは、夏のきたると云を衣につきて着の字にもいへり

更衣を読侍ける

慈 円

180 ちりはてゝ花の陰なき木の下にたつ事やすき夏衣かな

花の陰なき木の本にたつ事やすきとは、花のある時立て行はいつまでもゐたきなり、散て立事は辛勞なしと云

り

春を送て昨日のことし

「五五ウ
道 濟ナリ

181 夏衣きて幾日にか成ぬらむ残れる花はけふも散つゝ

きて幾日にか成ぬらんとは、題の心が春を送て昨日のごとしといへば、昨日にはあらず、又とをくはなし、しかればきていくかにかと云り。残れる花はけふもちりつゝといへる心に昨日はきこえたり

俊成ナリ女

182 折ふしもうつれはかへつ世間の人の心の花染の袖

うつればかへつとは、色みえてうつるふ物はの本哥也、人の心はうつるひやすき物なれば、折節も世の中の人の心にひかれてかはりたると云り、人の心の花のごとく此花染もかくのごとし

「

卯花如月

白河院

183 卯の花の村ゝさける垣根をは雲まの月の影かとそ見る

むらゝさける垣根をば雲まの月のかけのごとしと也、やうなし

重 家

184 卯の花の咲ぬる時は白妙の浪もてゆへる垣ねとそみる

さきぬる時は白妙の浪もてゆへるとは、わたつみの波もてゆへる淡路嶋山の本哥なり、垣にゆへると云詞も縁あり、かたゝよき取合也

齋院に侍ける時神たちにて

式 子

185 忘れめやあふひを草に引むすひかりねの野への露の明更秘哥

あふひをよめる

小侍従
「五六ウ

186 いかなれはその神山のあふひ草年はふれ共二葉なるらん

その神山のあふひ草年はふれども二葉なる覧とは、年をへて木は大木とはなれどもあふひは二はなる覧といへる事を

あさかの沼書たる所

雅 經

187 野へはいまた浅香の沼にかかる草のかつ見るまゝにしける比哉

あさかの沼にかかる草のとは、野は浅けれどもかつみはつとそだつ物なればなり、かつはかく也、かつみ草はまともなり

後賢門トハ大義ニ
十二門有其一也

安 芸」

188 桜あさのおふの下草茂れたゝあかて別し花の名なれは

おふの下草しげれたゞとは、夏草のしげれるはいやなれども、花の名なればしげれたゞといへり、大あらしきの森の下草共桜麻のおふの下草共本哥はアリ

好 忠

189 花散し庭の木のはも茂り合て天てる月の影そ稀なる

庭の木のはもしげり合て天てる月のかげそまれなるとは、花のためにも月のためにも青葉の所行也、いづれにもうたてしと也

190 かりにくと恨し人の絶にしを草はにつけてしのふ比哉

恨し人の絶にしをとは、かりにくとはかりそめに来る人也、この哥の面は故郷の荒たるに」五セツ 草をかる人のくるをなかりそと云つるに、後はいづかたにも草の茂りたればこゝへは来ぬ也、然ば人の絶にしと読り、下の心は、古里の荒たる所へはかりぞめにとひし人もとはねば草ばにつけてしのぶころかなとよめり、此哥は夏の季に

見えず、底に夏草の心有り

元 眞サネ

191 夏草はしけりにけりな玉鉾の道行人もむすふ斗に

玉鉾の道ゆき人もむすぶ斗に、玉鉾は大道也、草を結ぶは二すちある道のしるべ也、しほりは山路のしるべ也、大道なれ共草の茂れば結ぶ斗にと読り

延喜御哥「

192 夏草は茂りにけれと郭公なを我宿に一こゑもせぬ

茂りにけれど郭公とは、木の茂りを云べきに草を讀出し給ふ也、草も茂りたるころなればなど一声もせぬと郭公を云たる事なり、王フナの御哥にはよし

人 丸

193 なく声をえやはしのはぬ郭公初卯花の影にかくれて

えやはしのはぬ郭公初卯花のかげにかくれてとは、郭公が卯花の陰にかくれてやはこらへやするかこらへべきか也、又えやはしのはぬなれば、はたしてはなかと云心也、此しのはぬは三度こゝろをかへしていひたる事也、大事の哥也

「五八ウ

郭公なかととはなかうずらふ也、明更に片岡の木すゑおかしく見え侍ければとは、時鳥を聞かんと思ふ心より梢をも心を付て面白みる義也

紫 式部

194 郭公声待とは片岡の森の雫に立やぬれまし

声まつほどはかた岡の森の雫に立やぬれましとは、たゞ待てもきく、是は待たる証拠には、もりの雫にぬれたるが待たるしるしなるべし、森の雫に女房などのぬれて時鳥を待たるなり、心有べし、へ足引(朱)の山の雫に君待とわ

が立ぬれぬ山の雪にと云本哥の心也

賀茂にこもりける暁、郭公なきければ

弁乳母

195 郭公み山いつなる初声をいつれの宿の^(朱)誰か聞らん^(朱)・

サノミフカキ
山ニハアラズ

み山いつなる初声をいつれのやどの誰か聞らんとは、この宿にて初こゑをきゝてたれかきかん、我こそ聞たれとまもしたる心也

読 人

196 ^万さ月やみうの花月夜時鳥きけ共あかす又なかんかも

きけ共なかずまたなかんかもとは、卯の花月の時分は又なかと也

197 ^万をのが妻^恋。つゝ鳴や五月闇神南山の山郭公

恋つゝなくやさ月やみ神なひ山の山郭公とは、さ月やみ又み山なればくらき也、をのがつま」六〇ウ 恋つゝとは、わが妻をよびてほとゝぎすゝとなく也、惣而諸鳥のなくは我が友を呼也、此哥は後に入、其ゆへは序に妻ごひする神なひの時鳥とあれば也

家 持

198 郭公一声なきて^(朱)いぬる夜は^(朱)いかてか人のいをやすくぬる

一声なきていぬる夜はとは、時鳥の其まゝいねたる事也、いかでか人のいをやすくぬるとは、一声をきゝては今一声聞たきゆへいねられぬといへる事也、いぬるいかでいをやすく三をかさねたる也

能 宣^ズ

199 時鳥鳴つゝいつる足引のやまとなてしこ咲にけらしも

「

やまとなでしこさきにけらしもとは、なでしこも五月さく物也、ほとゝきすもいま時分なく物なれば也

経信

200 へ二声となきつときかは・郭公衣かた敷うたゝねはせん
(朱)

衣かたしきうたゝねはせんとは、二声はわがきかぬ也、人は二こゑをきくや、二声まだなかずはねずしてきかんと云義也

待客聞郭公

白河院

201 郭公また打とけぬ忍ひ音は来ぬ人を待我のみそきく

まだ打とけぬしのびねは来ぬ人をまつわれのみぞきくとは、人を待てこゝろを」六二ウ すますゆへ郭公の忍び音をも聞と也

花蘭左大臣

202 聞てもねられさりけり郭公待し夜ころの心ならひに

まちし夜ごろのこゝろならひにとは、きゝてはなをねられぬ義也

神たちにて郭公を

マサ
匡房 詩ヲモ作ル人也

203 卯の花の垣根ならねと郭公月の桂の影になく也

垣ねならねど郭公月のかつらのかけになく也とは、うの花もしろき物、月も白きなれば、郭公は白き事をこのむ物なりとす

俊成

204 昔おもふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山ほとゝきす
(朱)

草庵の夜の雨に涙なそへそとは、へ蘭省花時錦帳、下芦山雨夜草庵中の詩の心也、蘭省は太政大臣の居所也、白樂

天唐太子賓客にして太政大臣の位にゐて、老後に芦山に引籠て此詩を作と也、俊成は四代につかへ給ふ人也、保元の乱にあふてかなしむ心也、此哥の中に色々の心こもりたる也

205 雨そゝく花橘に風過て山子規雲になくなり

花橘に風過て山時鳥雲になく也とは、雨そそき橘かほり、山時鳥は雲になきて、天象シヤウ地義の景を調たる也、雨そゝくはあらくふりたる雲に郭公のたかゝとなきたるさま也、そゝく「ホニ」は小雨をも云り、此哥をならべて入る事は、昔おもふの哥余におもひふかき哥なれば、氣を散る哥を入たり、何れの躰にも達者なる哥読也、此子細は秘事也

相 模

206 きかてたゝねなまし物を郭公中ゝなれや夜半の一声

ねなまし物を時鳥中ゝなりや夜半の一こゑとは、一声をきかずは有べきに聞ては更にねられぬ也

紫 式部

207 たかりもとひもや来ると郭公心の限待そ侘にし

とはこゝろをつくしてまちわびたれば、よそへゆくなりとす

周 防

208 夜をかさね待かね山の時鳥雲井のよそに一声そきく

とは、此哥も夜をかさねて待たると奉公だてをしてたるに、雲のよそへなきて行ば無曲と也

海辺郭公を

209 へ二声と・きかすは出し時鳥幾夜あかしののとり成とも

いく夜あかしののとりなり共とは、こゝは朝ぎり月などを読たる所なれば面白き所也、人丸の哥を心にもちて読

按察使公道

る哥也、時鳥の一こゑをきゝてあらぬ事共也、かゝる面白き事をそろへたれば、今一こゑと執心するなり、郭公の一こゑをかこちて読り

「六三ウ

範光

210 郭公なを一声は思出よ老その森の夜はのむかしを

とは、範光昔より時鳥に忠節をしたれば、一こゑは公界に鳴也、今一声はりんじになきてきかせよとの義也、老その森とは範光が老たりしと云義也

高倉

211 一声はおもひそあへぬ郭公たそかれときの雲のまよひに

とは、思ひぞあへぬは明ぼのなどはおきさはぐ事あり、又たそかれ時は人をもたそといひ、何となくさわがしき時分なれば、取みだしたる折節に一こゑはおもひぞあへぬとなり、雲のまよひとはまぎれたる事也

「

摂政

212 有明の長面見えし月は出ぬ山子規まつ夜なからに

と、長面有明の月も出たれ共、時鳥は待夜ながらにつれなき物とおもひたれば、一こゑなきたると也、
(本)
へ有明
感情ふかし

俊成

213 我か心いかにせよとて子規雲まの月の影に鳴らん

とは、晴たる月よりも月は雲まに見て猶面白也、時鳥の一こゑと云、雲まの月と云、かた／＼面白き事をそろへたる義也、しかればわが心いかにせよとてとは読り

「六四ウ

太政大臣

214 子規鳴て入さの山のは、月(朱)ゆへよりも・うらめしき哉

なきて入さの山のは、月ゆへよりもとは、月よりもなきて入山はうらめしき也、此山かなくはこゝにゐうずる物と也、なにゝつけても此山のは、うらめしきと也、入さは名所にあらず、たゞ山に入義也

親 宗

215 有明の月はまたぬに出ぬれと猶山深き郭公哉

とは、月はまたぬとは夏の夜のみじかき感也、あり明はつれなき物なれ共、出るにほとゝぎすは月よりもつれなきと也

杜間、子規

保 季

216 過にけり篠田の森の郭公たえぬ雪を袖に残して

とは、しの田の森はしげき所なれば雪もしげしと也、しからば時鳥のこゑもしげかるべきにしげくはなかぬと云義也、たえぬ雪を袖に残してとは、感涙雪を袖にゆづりて時鳥は過らんと也

家 隆

217 いかにせんこぬ。夜あまたの郭公またじとすれば村雨の空

たのめつゝ来ぬ夜あまたになりぬればまたじとするぞまつにまされるの本哥なり、来ぬ夜あまたの郭公とは、また来ぬなれ」五九ウ ばふてゝまたじとおもふに、村雨のすれば又またるゝ也、然れば如何にせんと云り

式 子

218 声はして雲路にむせふ郭公涙やそゝくよひの村雨

むせぶとは、たとへば水のながれの物にさはりてながれぬ義也、其ごとく涙にむせびてはなかれぬ物也、泪やそゝくよゐの村雨とは、子規のなみだがむら雨ともなりたるか也

219 郭公なを(朱)うとまれぬ心かな・なか鳴里のよその夕暮

とは、時鳥にはうとまれたれ共、よそのさになくはなをゆかししと也、我はうとまぬと云心也、(朱)時鳥ながなく里のあまたあればの本」哥也、古哥にはうとみたるといへる心を此哥はうとまれぬと読たる也

公 経

西行法師

220 きかすともこゝをせにせん子規山田の原の杉の村立

一説、きかず共こゝにて時鳥をきゝては簡要なるべきに聞たると云心也、(朱)雲埋ム老樹ヲ空山中ノ云句の心也、一説、杉の梢にて鳥のほのかになくをきゝて時鳥かとおもふ也、なに鳥にても爰にて聞ば時鳥なるべしとおもふ也、たとへきかず共爰にては簡要と思ふべきにと我を云たる義也

221 郭公深き嶺より出にけりと山のすそにこゑの落くる

深き嶺より出にけりととは、とを飛をしてと山のすそにこゑはおちくるやと也、出にけりは覽也

「六五ウ

山家暁子規

後徳大寺左大臣

222 小篠ふく賤の丸屋のかりの戸を明方になく郭公哉

さゝの丸屋とは、上をも垣をもさゝにてふくを云、戸をも柴にてそとしつらふ物也、其戸を明るはやすき也、戸をあくるがごとく夏の夜もはやくあくる也、爰にてなかずはあぶなき事也、よきし合にて、此明がたに時鳥のなきけるよといへる心也、暁と云題にて定家は明更は読まじきと也、暁は明更よりはふかきかなれば也

撰 政

223 打しめり菖蒲そかほる時鳥鳴やさ月の雨の夕暮

うちしめり、なくやのや、雨の夕暮、此三は別の詞也、此やは疑にもあらず、もにかよふやにもあらず、たゞ

やといへるや也、此哥を心敬の説により沈香をたきたるにちりく^(朱)と立てしかのあるやうの哥也と云り、静喜の説には^(朱)沈香坐^{シテ}花亭^ニ吹^フ笙^ヲと云句の心なるべしと也、時鳥なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかなの本哥なり

俊成

224 けふは又あやめのねさへかけそへて乱そまざる袖の白玉

端午にはくす玉をかくる也、薬玉^{ツクシメ}統命^{ツツミ}綏共^{ツツミ}云也、童の袖にかくればいのちながしと云り、みだれぞまざるはなみたの事也

五月五日くすたまをつかはして侍ける人に

経信

「六六」

225 あかなくに散にし花の色々は残りにけりな君か袂に

とは、くす玉には色々の花を結びてつくる物なれば、うつくしき花は君かたもとにのこりたると也

五月六日もろ共になかめあかして朝になかきねをつゝみて紫式部につかはしける

上東門院少将

226 なべてよのうきになかるゝあやめ草けふまでかゝるねは如何ゝみる

うきにながるゝとは、うきは沼の事、ながるゝはかり捨たるあやめの事也、けふまでかゝるねはいかゞ見るとは、あやめのねのながきごとくねをなくと云り、女房の事なればなに事にてかあるらん、不如意のありと云義也

返し

紫式部

「

227 なに事とあやめもわかつてけふも猶袂にあまるねこそ絶せね

何事ゆへねをばなき給ふとはしらねども、我もそなたのごとくかなしき事ありてねこそたえせねと読り

山^ノ畦^ヰ早苗

経信

228 早苗とる山田のかけひもりにけり引しめなわに露そこほるゝ

しめ縄より露のしら玉のこぼるゝの見事なるを、もりにけりとはらん也、なりの哥也

五月雨を

摂政

229 小山田に引しめ縄のうちはへて朽やしぬらん五月雨の比

うちはへてとはをしなべての事也、又袖などをも打はへてと云り、長高哥也、別子細なし

「六七」

230 いかばかり田子のもすそもそぼつらん雲まも見えぬ比の五月雨

伊勢大輔

田子のもすそはぬれつきたる物なれども、雲まも見えずふる五月雨にはさぞなをぬれぬらんと也、そほつはぬるゝ義、さみだれの比と云べきを、比のさみだれといへる事は雲まも見えぬ比といひつゞけたれば也

経信

231 みしまえの入江のまこも雨ふれはいとゝしほれてかる人もなし

入江のまこも雨ふればとは、入江ははしなれば先いりえよりして苅義也、雨ふればかる人もなしと云り、底の心はわが身の人にもしられず」しほれはてたと述懐して読り、人にも賞翫せられぬ事を慈鎮の山田^山のくろの村薄の哥と同じ

匡房

232 まこもかる淀の沢水深けれと底まで月の影はすみけり

まこものある時は月のうつるをも見ざりつるが、苅て後月はありけるよと見たる心也

雨中木繁^ニ

基俊

233 玉かしはしけりにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまで

しげりたるおくには神のまし／＼さうなるしめをはへてわがゐたると云ぬばかりの様也

入道。前
関白大政大臣「六ハ」

234 五月雨にをふの川原のまこも草からでや浪の下にくちなん

とは、蒔すてたる草こそ朽物なれ、是はねのある草なれども此五月雨には朽なんと也、あたら物なりと云心賞翫の義也

五月雨のこゝろを

定 家

235 玉鉾の道ゆき人の言伝も絶て程ふる五月雨の空

人の伝にも音信は有べきなれども、此程の五月雨にはかきたえてなしといへる心也、玉鉾は海道の事也、雨によりて程ふるとは云へり

荒木田 氏 良

236 さみたれの雲の絶まを詠つゝ窓より西に月を待かな

いつかたにても雲の絶まを見ばそれより月は出んと也、月を待は東を見るべきに西に待たる一かんと也、雲の絶まを見出して月を待たる也

忠 良

237 樗さくそとも木陰露落てさみたれはるゝ風渡るなり

是はなりの哥也、心をつけて見るべき也

定 家

238 五月雨の月はつれなきみ山より独も出る郭公かな

たとへば景などのくらき夜などにさてもよく来たる物かなといへるやうにほとゝぎす殿はよくきたる物かなと云
たる義也

太上天皇 「六九」

239 郭公雲ゐのよそに過ぬなり晴ぬおもひの五月雨の比

とは、爰もとにてなきたらば心もはれくゝとすべきに、雲ゐのよそに過行ばこゝろもまうくゝとしたると也

雨後郭公

讃岐

240 五月雨の雲まの月のはれゆくをしはし待ける時鳥哉

夜一夜郭公を待たれ共なかず、雲まの月のはれ行時分なけば、さては此月をまちてなきけるよと思ふ心なり

俊成

241 誰か又花橋に思ひ出ん我もむかしの人となりなは

昔の人をおもふゆへに其むくひにて人にもおもはれん也、然共古人をおもへば其徳あるによつて也、我は徳なれば何によりて古人ともならば思出られんと也

通具

242 行末を誰しのへとて夕風に契かをかん宿の橘

たれしのべとは、まへの哥のごとくわか徳なればたれか古人となるともしのぼんと也、しからば契をきても無用也と云心也、朝風とも何風とも云べきに夕風とをくは夕はしのぶ心のあれば也、契かのかの処は置字也

式子

243 帰り来ぬ昔を今におもひねの夢の枕に匂ふたち花

忍びても昔は今に帰らぬ義なれ共、むかしをおもひねにすればまくらに橘のにはふはむかしの夢なりとす

「七〇」

244 橘の花ちる軒のしのふ草むかしを掛けて露そこほるゝ

忠 良

古郷のなりの哥也、むかしを掛けて露そこぼるゝとは、軒のしのふ草むかしを掛けてこぼるゝ両義也、昔をかけたとはかざり也、昔をしのふ涙の義也

245 五月やみみじかき夜はのうたゝねに花橘の袖に涼しき

慈 円

夏の夜もそとうたゝねもそと也、花橘の袖に涼しきとは、ながき夜なり共あかれまじきに「いはんやみじか夜なればあかれぬ也、おもしろさうに橘の袖に匂ひたる事也、なりの哥也、うたゝねは衣服を付てぬるを云也

読 人

246 尋ぬへき人は軒はの古郷にそれかとかほる庭の橘

人は軒ばとはのくに疎遠なる義也、それかとかほる庭の橘とは、古郷なれば尋ぬべき人もなし、橘の匂ひを其人のきて問やうなりとす、軒ばの古郷とつゞく事はふりたる軒と云事也、常には古郷の軒とこそ読べきに是はくり返して読り

247 子規花橘の香をとめて鳴は昔の人や恋しき

「セー」

とめてとは尋る事也、女院小原の寂光院にまします時此哥をかきて置給ふ也、女院の御心のうちかくのごとし

俊成女

248 橘の匂ふあたりのうたゝねは夢も昔の袖の香そする

夢のにはふといへる事面白き詞也、橘のあたりにぬれば夢も昔の袖の香ぞすると也、夢も昔とつゞくる也、夢も昔香も昔袖も昔の香也、三を云たり

家隆

249 ことしより花さきそむる橘のいかて昔の香に匂ふらん

とありく^{タイ}と読り、わか木の事也、今年よりはなさきそむる桜花ちるといふ事はならはざらん」の本哥也、香は体句^{ユウ}は用也

定家

250 夕暮^{秘詩}はいつれの雲のなこりとて花橘に風の吹らむ

潤五月郭公と云心を

国信^{サネ}

251 子規さ月みな月わかねてやすらふ声そ空に聞ゆる

とは、みな月の時鳥と云てなかぬ義也、稀なる事也、さ月はをのがき月とて鳴月也、みな月とおもへばさ月也、やすらふ声とは思案してなきたると云事也、時鳥に涼きは有まじきなり

白河院「セニッ

252 庭の面は月もらぬまで成にけり梢に夏のかけ茂つゝ

夏のかげはおほく茂りて月の影はなしと云り、問答したる哥也

惠慶

253 我が宿のそもにたてるならのはの茂みに^(朱)すゝむ夏^(朱)はきにけり

此哥は六月の哥なれば夏はきにけりとは、夏のはじめをこそいふべきに、是はみな月をいひたる事不審也、すゝむ夏のきたると云心也、^(朱)木のまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけりと古今の秋の中ほどに読たる哥也、是も心づくしの秋がきたると云心也、そともは心敬の説にはせど也、^(朱)さしすせ、その五韵なり」

鵜川を

慈円

254 鶺鴒かひ舟哀とそ見る武士のやそうち川の夕闇の空

うかひ舟の此世より罪をつくりて来世に沈べきの不便なる事を読給へり、武士の八十氏とは氏は八十あるによつて也、九今八十は数のおはりなるゆへ也、夕闇にみると云事はかゞり火の事也

寂 蓮

255 鶺鴒かひ舟たかせさしこす程なれやむすほゝれ行篝火のかげ

たかせさしこすほどなれやとは、かゞり火のひらめくはたかせをさしこすと見えたととなり、見たる当位なるべし

「セツ」

256 大井河かゝりへさしゆく・鶺鴒かひ舟幾瀬に夏の夜を明すらん

幾瀬とはおほき事を云たるを、是は少き事に云り、夏の夜のみじかきなればいくせまでも有まじき事に読なしたる也、かゞりさすとはともすと云義也、舟もさすなれば也

俊 成

257 久方のへ中なる河・のうかひ舟いかに契て闇をまつらん

へ久かたの中におひたる里なれば光をのみぞいとふべらなると云古今の哥をとれり、久方の中なるは桂の事也、則桂川也、此川にては月を專賞翫すべきにいかんとして闇を待らんと読」り、名譽の哥とす

定 家

258 いさり火の昔の光はの見えて芦屋の里にとふ螢かな

芦屋の里を見れば昔行平業平ともないて此里にいらせ給て、へはるゝ夜の星か河への螢かもと読給ひし其むかし
(朱)のやうに今も螢を見れば其むかしの有様なりと読り

撰 政

259 窓ちかき竹のはすさむ風の音にいとゝ短きうたゝねの夢

式子

うたゝねの夢も夏の夜もそとなればいとゞみじかきと読り、竹の風に夢をさまされたるなりの哥也、涼しき心也、
(ホ、ニナル、ニリ、)
 へ風竹生夜窓間臥月」七四ウ 松照時台上歩ツスキニアリクと云詩の心也

竹風夜涼

公継

260 窓ちかきいざゝむら竹風ふけば秋におとろく夏のよの夢

いざゝはこざゝ也、むら竹はちとさしのびたる竹なり、かならずさしのびたる竹のもとにはいざゝの生る物也、
 いざゝのいはるる義也、夢は物の香にさむる物也、是は秋におどろきてさむると也、やれ秋になりたるぞと驚た
 る心也

慈円

261 むすふ手に影みたれゆく山の井のあかても月のかたふきにける

此山の井は慈円の行し給ふとき、あかの水を汲て井のもとにて月を御らんじて夜中の月の「井の水にうつりたる
 を読り、影みだれ行とは、雫に月の影のみだれ行きへおしきに、夏の夜の月のはやくかたふきたるといへる心也、
 停午テイゴの月井ニうつると云題にあり、夜中の月の井にうつる義也、たゞの月はうつらずと也

障子に清見か関書たる所

通光

262 清見かた月はつれなき天の戸をまたてもしらむ浪の上哉

月は長面天の戸をまたでもしらむとは、清みがたは東南は海也、西北は山也、またでもしらむとは、東より夜の
 あくるなり也、今ちと夜もまたかしとおもふにはやくあけたるといへる心なり、短夜の義也

摂政「七五ウ

263 かさねても涼しかりけり夏衣薄き袂にやとる月かけ

夏衣をかさねたらばあつかるべきなれども、つよく涼しきといはんため也、^(朱)更て見ぬ光も涼し夕月夜、宗祇の句も此心也、何時も此手は存へからずと云今

水辺自秋冷^{スサマシ}

有家

264 涼しさは秋や歸りて泊瀬川ふる河のべの杉の下陰

題ニ自秋冷といへば冬は読れず、しかれば大事の題也、秋やかへりてとは、あまりに涼しきほどに秋がはてたるかとおもへばさはなくして秋がかへつて涼しき也、たとへば人を恨んとおもふに、歸てそなたより恨られたると云ほどの事也、秋やかへりてはつせ川とは、秋の「はつと云風詞也

西行

265 道のへに清水なかるゝ柳陰しはしとてこそ立とまりつれ

此道のべの清水へ修行の時立寄てすむまゝ、しばしとおもひたれば日を暮したるよとの義也、つれと云字妙なりと云り

266 よられつる野もせの草のかけるひて涼しく曇夕立の空

とは、先夕立のくもりきて夕立のしつべきに草ばのおごりたるやうに見えたる義也、よられつるの五もじせいの詞也、涼しくくもるも制の詞也、よられつるはたゞの所にては苦しからざる也、名所也、野もせはせばき野を云り

267 をのつから涼しくもあるか夏衣日も夕暮の雨の名こりに

日も夕暮の雨の名残にとは、雨の夕暮と云事也、涼しくもあるかのかの字はかな歟

268 露すかる庭の玉篠打なひき一むら過ぬ夕立の空

こゝははやすぎてよそへタだちの過ると云義也、庭のなり也

雲隔^ツ遠望^ツ

俊頼

269 とをちには夕立すらし久方の天のかく山雲かくれ行

天のかく。山雲かくれゆくとは、とをちをとをきに読なしたる也、哥は聞えたり、見たるさま也

夏月を

頼政「

270 庭の面はまたかはかぬに夕立の空さりけなく澄る月かな

雨のふりたるやうにもなく、さありさうにもなきと云義也

式子

271 夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたふく山に日晩のこゑ

夕立の過て、日晩の鳴たるの涼しき様なり

忠良

272 夕附日さすや庵の柴の戸にさひしくも有か蝸のこゑ

なりの哥也、夕月日さすや岡^(朱)べの松のはのいつともわかぬ恋もする哉の本哥也、夕月夜両説也、山家のなりの

哥也

摂政「セセツ

273 秋ちかき気色の森になく蟬の泪の露や下は染らん

秋ちかきけしきなれば、蟬の涙にて下葉をそむらんと也、病葉^{ワクラバ}の心也、蟬になみだは有まじき事なれども鳴と云

に付て也、へ蟬鳴^(朱)黄葉^ク漢宮秋と云句の心也、露はさびしきかなしき事は読ね共、秋ちかきと云によりてさびしき心をよめり

讃岐

274 なくせみのこゑも涼しき夕暮に秋をかけた森の下露

露は夏なれども秋をかけたると云り、たとへば兼官^{ケンクワン}などの様也、懸官^{ケン}とは右馬頭に大裏にて役あれ共、美濃守に成て国ヲ持たるを云り、二役かくるを云也

螢のとひ渡るを見て

忠見

275 いつちとか夜は螢の上^{ノボ}のらん行方しらぬ草の枕に

螢が草のまぐらをしたるがいづちへか行らんと読り、人の草の枕にはあらず、へいづくにも草の枕をすむしは爰を旅ともおもはざらなん、是は籠に虫をいれて読る也、へいづくへいづくこへいづち・いづちはつよし、いづく^{チ同}は見て・いづらはなるらん也、へいづちは・見ぬ事也・どちへと云義也^(朱)

撰政

276 螢とふ野沢にしける芦のねのよなくしたにかよふ秋風

芦のねのよなくとは、芦はねのながき事、よはあしのよを云そへてそそと秋風」セハウの吹たる様也、螢はかざりにをく也、沢に似合たれば也、かざりはひれとも云也、へ螢火乱飛^{ユルヒ}秋已^{ユル}近の句也、短夜の心也^(朱)

納涼を

俊恵

277 楸おふるかた山陰にしひつゝ吹ける物を秋の夕風

秋風のいづくにか吹らんと思たれば、こゝに秋かせ殿はゐられたるよといへる義也、心敬^(朱)はひさ木、宗長^(朱)はひさ木と云へり

嬰麦露滋

高倉

278 しら露の玉もてゆへるませの内に光さへそふ床夏の花

たゞだに床夏は見事なるに、玉をもつてませをゆいたればいよく見事なりとす、浪もてゆへる淡路嶋山の本

哥の詞也

夕かほを読む

前太政大臣

279 白露の情をきけることはやほのく見えし夕顔の花

情をきけることはやとは、源氏に^(朱)心あてにそれかとぞみる白露の光そへたる花の夕顔、返し^(朱)よりてこそそ

れか共見れたそかれにほのく見えし夕顔の花と云心也、情をきけるとは情をかけたると云心也、源氏の心を其

まゝ読り

慈円

280 雲まよふ夕に秋をこめなから風もほに出ぬ萩の上哉

雲も秋をこめてもち萩も秋風をもちて、底には秋なれ共ほに出ぬ也、おかさぬ舩に見たる也

太上天皇 七九ウ

281 山里の嶺のあま雲と絶して夕涼しき嶺の下露

此哥は高野山などの様也、所く白雲はとたえて雨のはれたるなりなるべし

女御入内とは始て大裏へ御参を云り、其時屏風など結構してたて給ふ時の事也

入道前関白

282 岩井くむあたりの小篠玉こえてかつく結ふ秋の夕露

岩井はあたりに石をたゝめば也、くむ雪をあたりのをさゝ玉こえてと読り、夕露とはしきの露にはあらず、井を

結ふ露也、此露を秋のさきづかひに読り

宮内卿 「

283 かたえさすおふの浦なし初秋になりもならずも風そ身にしむ

おふのうらなしとは、なりもならずもいはん為なり、宮内卿病中の説はわろし、樹陰の納涼の題也、云心は夏より秋になるやらんならぬやらん、何様風は身にしむと也、身にしむとあるはそとしみたる義也、かたえは海の方へはさゝず、こなたへさしたるかたに梨のなるを云り、へ(朱)おふの浦にかたえさしおほひなる梨のなりもならずもねてかたらはんの本哥也

慈 円

284 秘哥夏衣かたへ涼しくなりぬなり夜や更ぬらん行あひの空

「ハ〇ウ

月次の屏風

忠 岑

285 夏はつる扇と秋の白露といつれか先はをかとすらん

扇ををかんか露ををかんかといひて、露をゝかんと治定する也、をかんはをかんずらふと也、へ(朱)星か川辺の蜩がも我がすむ方にあまの焼火かとの哥も前をうたがひてたく火なりと治定してよめり

貫 之

前ノ題ト同、其次ニ入ヘ所ニヨリテ同事也、屏風ニ御歌スル所ヲ繪ニ書タレバ其様ヲ説ルト也

286 みそきする河の瀬見れはから衣日も夕暮に波そ立ける

此哥はなりの哥也、なりの面白を其まゝ読り、夏の夕暮に浪の立の見事なる義也、常の人のか様に読たるは打ひらめなるべし、其身に「て読は面白きなり

勢州白子住

内山宮内少輔

天文十九年庚戌四月廿一日巳時

秀隆 (花押)

家之御本ニテ度々校合終、秘本ナル

者歟、

後藤氏持主

（白紙）

つくくと思へは近キ世中を心となけく我身也けり

幾程の身そと　いかゝ思ふらん

ひとひもいとへ老の世の中

東三川牛クボニ住ス　古白法師

此連哥百廿貫而筑波集ニ入ル

牧古白法師